



医療法人社団 慶実会
グレースデンタルメディカルクリニック大宮分院
埼玉県さいたま市大宮区宮町3-7-4 谷中ビル2F
医師 佐伯 久美子

話題①：自分の身を使った研究

メラノーマの免疫療法の開発者であるシドニー大学のScolyer教授は昨年6月に脳腫瘍(Glioblastoma)と診断された。生きることへの強いご意志のもと、ご自身の開発された免疫療法を含めた集学的治療をご自分の身で試されている。“The doctor gambling with his own life”としてメディアでも取り上げられているが、最近のお姿から活力が溢れている。自らの身を使った研究として、古くは歯科医師ウェルズの麻酔法開発がある。悲しい最後になってしまったが、その功績は死後にパリ医学会から評されている。彼の方法は現在では倫理的観点から認められないが、形を変えて自らを医学の発展につなげたいという思いは受けつがれていると感じた。

話題②：私のリベンジ

『生きるとは何か』を知るために訪問診療の門を叩いた。あるお寺の住職から「医学とは、生きたいという煩悩を満たすためのものではないのか」と問われて答えられなかった。私が最も尊敬する二人の科学者は自ら厳しい最後を迎えた。なぜなのか...その答えを知りたい。

ピルケ先生は優れた小児科医であるとともに人格者であった。私の祖父はウィーン大学でピルケ先生に師事したがとても優しくしていただいたと父から聞いている。ピルケ先生はアレルギーの命名者として知られるが、彼の栄養学的研究は多くの子どもを救った。なぜ50代の若さで奥様とともに覚悟の最後を迎えられたのか...幼い頃、父に見せてもらった本の表紙のお二人の写真は今でも忘れられない。

ボルツマンは優れた物理学者であり、熱力学に関する達見は人間の叡智を超えたものを感じる。熱力学的観点から宇宙を見た際に何か絶望的なものを感じたとも言われているが、彼は何を見たのであろうか。

医学も物理学も最後は絶望につながるのだろうか。それを覆し、尊敬するお二人の魂を安らかなものにするためにも、私は生きる意味を問い続ける。これが私のリベンジである。